一

後の問いに答えなさい。（二十点）

問　次の［①］～［③］にそれぞれ適切なひらがな二字を入れて、慣用句を完成させなさい。

① 君は猫を［①］っている。

② 手に［②］をにぎる展開だ。

③ さっきから［③］の空になっているぞ。

問　次の④～⑥の文は、ある特定の状況を説明しています。それぞれの状況を表した四字熟語の空欄に、適切な漢字一字を入れなさい。

④ ある生徒は、授業中にまったく集中を切らさず、先生の話をしっかりと聞き続けました。　→　□□不乱

⑤ 試合の最中、彼女はどんな緊迫した場面でもあわてずプレーを続けました。　→　□静沈□

⑥ メンバー全員が力を合わせ、課題の解決に向けて取り組みました。　→　□致□結

問　次の文章を読んで、［⑦］～［⑨］に当てはまる部首名を、ひらがなで一つ答えなさい。

漢字は、いくつかの部分に分けて作られています。特に「部首」と呼ばれる部分は、漢字の意味や使われ方に大きな影響をあたえることが多くあります。たとえば、「［⑦］」という部首は水に関連するものを表す漢字に多くふくまれており、「［⑧］」は人に関する漢字、「きへん」や「［⑨］」は植物に関係する漢字、「てへん」は手の動作に関わる漢字に使われます。これらの部首は、漢字の意味を予想する手がかりとなるだけでなく、漢字の成り立ちや歴史を知る手助けにもなります。

問　次に挙げるのは、AさんからBさんに宛てた手紙と手紙の書き方に関する文章です。［⑩］～［⑫］に入る言葉として最も適切なものを、後のア～キの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

お元気でお過ごしのことと存じます。先日は温かいおもてなしをいただき、誠にありがとうございました。おかげさまで楽しい時間を過ごすことができました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

このように用件のみを伝えるのであれば、手紙のはじめに［⑩］、それに対応させる形で終わりに「草々」と書きます。これに時候の挨拶（「立春の候」や「陽射しも春めいてまいりました」などの季節の挨拶）を入れて、より丁寧な文面にするのであれば、手紙のはじめに［⑪］、それに対応させる形で終わりに［⑫］と置くのが一般的です。

ア　拝啓　　イ　賀正　　ウ　前略　　エ　中略　　オ　御中　　カ　敬具　　キ　以上

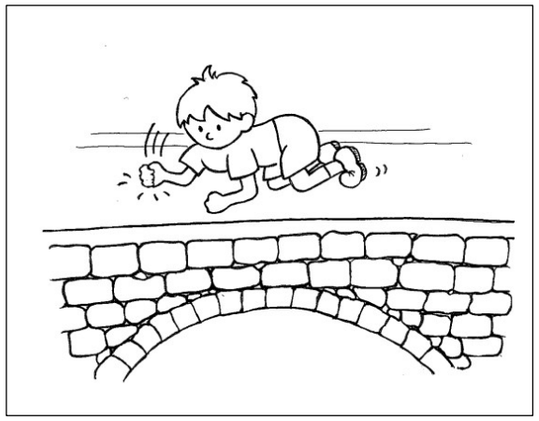
問　次の俳句を読み、季語とその季語が表す季節を答えなさい。

⑬ さくら咲けほめられもせず咲いている　　小林一茶

⑭ 初しぐれ馬の尻尾も濡れにけり　　松尾芭蕉

⑮ 朝顔や一輪深き淵の色　　与謝蕪村

問　次のイラストが表す最も適したことわざを解答欄⑯に答え、解答欄⑰にその意味を答えなさい。



問　私たちが日ごろ使用している言葉の中には「外来語」が多くあります。次の例に従い、文中の「日本語」を三か所「外来語」にして解答欄⑱～⑳に答えなさい。

〔例〕　君の助言は役に立った。　〔答〕　助言　→　アドバイス

君の発想はとても独特だが、つくるとなると費用が多くかかりそうだ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文の表記を一部変更しているところがあります。）（五十点）

最近、親しい庭師の友人に教えてもらいながら、庭の木々の手入れを自分でするようになった。ただ木を見上げるだけでなく、木にのぼり、枝ぶりや葉の様子を観察しながら、素手で木の葉や枝にふれ続けていると、木もまた自分と同じように生きていたのだという当たり前の事実を、理屈をこえて、全身で体感することができる。

大きなアカマツの木の枝から枝へ、やわらかな葉の刺激を顔や手に感じながらのぼる。古葉を一つずつむしっていると、いきいきとしたあまくさわやかな松葉の香りがする。

冬でもみずみずしい松葉の緑。葉の向こうから射しこむ陽光。朝露、風、光、鳥の鳴く声……そのすべてを、まるで自分までもが松になって、感じているような気持ちになる。

それまで、①何気ないただの木でしかないと思っていた庭の木々も、手を入れ、手をかけ、手でふれながら見守っているうちに、それぞれに、各々の美しさがあることに気づく。

どこにかくれるでもなく、目の前に開かれていた自然の美しさがある。だが、庭のカマキリや、足元のカエルが、だれの目にも見えるわけではないのと同じように、自然の美もまた、これを受け取るこちらの a［ジュンビ］がなければ、気づくことができないのである。

「うつくしさ（美しさ・愛しさ）」とは本来、「うつくしむ（慈しむ・愛しむ）」行為と切りはなすことができない。『古典基礎語辞典』（＊大野晋編、角川学芸出版）によれば、動詞のウツクシブ・ウツクシムという日本語には、「仁・慈・恵・愛の行為をする意」があるという。なにかをいとしく、うつくしく思う気持ちは、これを慈しみ、愛しむ行為と不可分なのである。

雨のなか買い物に出かけていたある日、次男が大きな声で、

「きょうはいいてんきだね！　あめがふってるしきれい」

とさけんだことがあった。そのひとことを聞いたとき、僕は［A］、雨を「うつくしむ」気持ちを、思い出すことができた。目先の用事や効率ばかりにとらわれ、自然のあるがままの美を受け取る自分の目が、閉ざされかけていたことに気づいた。

「きょうはいいてんきだね！」

そう言われてみると、雨のなかのいつもの街の風景は、本当に美しかったのである。

だがどんなに美しい風景も、刻々と移り変わっていく。だから、同じ景色を、同じ人と、分かち合える瞬間は二度とない。

そのことを思うと、僕は悲しくなる。

カナシ（悲し・哀し・愛し）とは、「……することができない」という意味をそえる＊接尾語「カヌ」と同根であるという。「愛着するものを、死や別れなどで喪失するときのなすすべのない気持ち。別れる相手に対して、何の有効な働きかけもしえないときの無力の自覚に発する感情。また、子供や恋人を喪失するかもしれないという恐れを底流として、これ以上の愛情表現は不能だという自分の無力を感じて、いっそうその対象をせつなく、大切にいとおしむ気持ち」と、『古典基礎語辞典』の「かなし」の項には書かれている。続けて、「自然の風景や物事のあまりのみごとさ・ありがたさなどに、自分の無力がb［ツウカン］されるばかりにせつに心打たれる気持ち」と記されているのは特に印象的である。

これ以上の愛情表現は不可能だという自分の無力さ、自然の風景の見事さに対比された自己の有限さ、そして力なさ。相手をうつくしむその思いが強ければ強いほど、僕たちは深い悲しみを知ることになる。

②「うつくしい」と「かなしい」の近さについては、子どもたちもまた、自然を通して、彼らなりに感じているのだと思う。

ある日、近所の電気屋さんの前で、長男が大きなシロスジカミキリを見つけた。ちょうど、虫を探そうと張り切って遠くの山まで出かけてきた直後のことであった。その山で見つけたどんな虫より、このカミキリムシは大きく立派だった。堂々としたその姿にしみじみと見惚れながら、「いままでで一番うれしい」と長男は目をかがやかせていた。

彼は自宅にもどると、すぐに大きな水槽にカミキリムシのための部屋を作った。手のなかで「ギィギィ」と鳴くシロスジカミキリを、彼は少しも恐れる様子がなかった。

この数日後、カミキリムシが動かなくなった。あれほど激しく声をふるわせて鳴いていた生命が、こんなにもはかなく、力なくつきてしまったのである。

③庭にうめてあげようか、と提案する僕に息子は、いつもより少しぶっきらぼうな調子で、死んだカミキリムシをさわるのはいやだと答えた。悲しみが、まだ「悲しい」と呼べる感情になる手前で、彼も彼なりに、ほろびていくいのちの消息を想っているのだと思った。

生まれ、生きるだけでなく、すべていのちあるものはほろびていく。あれほど美しかったカミキリムシのからだも動かなくなり、なめらかに動いていた関節もかたまっていく。［B］虫の肉体はくずれ、腐敗し、最後は土にのみこまれていく。

生み出す力も、ほろぼす力も、人知をこえた自然の偉大な力である。

日本神話における国生みの女神であるイザナミは、＊『古事記』によれば、八つの島を生み、次々と神々を生んだあと、火の神カグツチを生み出すときに全身が焼け、死亡したという。

亡くなった妻を追い、＊黄泉の国をおとずれたイザナキは、そこで妻にふたたび帰ってきてほしいと請うた。だが、［C］黄泉の国の食物を食べてしまっていたイザナミは、もうもとの世界にはもどれないのだった。

それでも、なんとか黄泉の国の神と交渉してみようと答えたイザナミは、そのあいだに自分を決して見てはならないとイザナキに言い残して消えた。ところが、待ちかねたイザナキは、その禁をc［ヤブ］ってしまうのである。

そこで彼が見たのは、恐ろしい光景だった。目の前には、蛆のわいた女神の死体が横たわっていた。

＊河合隼雄は『神話と日本人の心』のなかで、このときイザナキは「母なるものの恐ろしく暗い面」を見てしまったのだと指摘している。蛆のわいた女神の死体――それは、女神もまた「自然の一部」だという、残酷な事実を物語っていた。

「見てはならない真実」に直面したイザナキは、『古事記』によると、「見畏みて」にげたという。これをふまえて河合は、さらに次のように記す。

> イザナキはイザナミの姿を見て、「見畏みて」にげたという。ここに示された「畏む」態度は、単に恐ろしい怖いという以上の感情をふくんでいる。母なるものに対する畏怖の念と、ともかくそこには留まっていられない、という感情をイザナキは体験したのだ。

「うつくしい」のすぐ近くに「かなしい」がある。そして、④「おそろしい」のすぐそばには、自分より圧倒的に大きなものに対する畏怖の心がある。この悲しみや畏怖が、深い情緒へと育っていく道のなかばで、⑤子どもたちはしばしば「化け物」に遭遇することになる。

ドングリや虫を見つけたいという子どもの情熱と、お化けの話をしてほしいとせがむ彼らの熱意は、きっと無関係ではない。ツルツルの美しいドングリや、大きくて立派な虫を見つけたいのと同じように、彼らは自然の「恐ろしく暗い面」もまた、知りたいと思っているのである。

僕の仕事場は京都東山の麓にある。夜になれば、近くは人の気配もなくなる。ただ遠くで鹿の鳴く声だけがする。そんな夜もめずらしくない。

子どもたちはしばしば、ここの庭で遊んでいる。日中は元気に庭をかけ回っていた彼らも、夜になると D おとなしくなる。暗闇の向こうから聞こえてくるのは、人間でないものが発する声ばかりだ。「いまなんか変な声しなかった？」と、子どもたちは不安そうに僕の手をにぎる。

「お化けがくるぞ」と脅しても、昼間ならきゃっきゃっと笑っている彼らも、この時間に、ここでお化けの話をすると、E 泣き出しそうになる。

彼らはただ理由もなく、お化けを恐れているのではない。幼虫をカブトムシに変え、イモムシをチョウに変身させ、いくつものドングリを実らせ、カミキリムシのあざやかな d モヨウ をえがき出す自然が、同時になにか「恐ろしく暗い面」を持っていることを、彼らはどこかで直感しているのだ。人知を＊凌駕した自然を畏れる気持ちが、彼らに「お化け」を感じさせるのだ。

「化け物の進化」と題した＊エッセイのなかで＊寺田寅彦は、「全くこのごろは化け物どもがあまりにいなくなり過ぎた感がある」となげく。日常世界の彼方には、「常識では測り知り難い世界」が広がっている。人間の理解をこえた自然界の不可解な現象を、昔の人は「化け物の所業として説明した」のである。

だから、「化け物がないと思うのはかえってほんとうの迷信である。宇宙は永久に怪異に満ちている。（……）その怪異に戦慄する心持ちがなくなれば、もう科学は死んでしまうのである」。

夢中になってドングリを拾い、化け物を恐れて泣きそうになる。生命の開かれた秘密に驚き、宇宙の怪異に戦慄しながら、子どもたちは、うつくしく、かなしく、おそろしい自然を、全身でいつも探索している。

（森田真生「僕たちの「センス・オブ・ワンダー」」より）

＊注　大野晋＝国語学者。　接尾語＝他の語の下について意味をつけ加える語。　『古事記』＝日本最古の歴史書。　黄泉の国＝死者の世界。
河合隼雄＝心理学者。　凌駕＝他のものを上回ること。　エッセイ＝随筆。　寺田寅彦＝物理学者、随筆家。

問一　a [　] ～ d [　] のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　A ～ E に入る適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使ってはいけません。

ア　まるで　　イ　やがて　　ウ　はたと　　エ　いまにも　　オ　さすがに　　カ　すでに

問三　――線部①とありますが、庭の木々を「何気ないただの木でしかないと思っていた」のは、筆者がどのような状態にあったからですか。そのことが述べられている部分を本文中から五十字以内でぬき出し、初めと終わりのそれぞれ五字で答えなさい。

問四　――線部②とありますが、日常生活の中であなたが『うつくしい』と『かなしい』の近さ」を感じた経験を答えなさい。

問五　――線部③とありますが、この時の「息子」を筆者はどのように見ていますか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　死をむかえて動から静へと変化したカミキリムシを目の当たりにして、大きな衝撃を受けたまま自分の心がまだ整理できないでいる。
イ　カミキリムシの死を避けることのできないものとして覚悟してはいたが、実際にその瞬間に立ち会うと受け入れられないでいる。
ウ　急に動かなくなったカミキリムシを見て死の中にひそんでいる不浄さを感じ、自分の手で直接ふれることを拒絶しようとしている。
エ　静かな死をむかえたカミキリムシの美しさに心動かされ、その状態を保ってやるにはどうすればよいのかを考えようとしている。
オ　死んで間もないカミキリムシをすぐに処理してしまおうとする発言に対して、子どもなりに精一杯の抵抗をしようとしている。

問六　――線部④とはどういうことを言っているのですか。わかりやすく説明しなさい。

問七　――線部⑤とありますが、筆者は『化け物』に遭遇（そうぐう）すること」について、どのように考えていますか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　かつては自然界に存在していた、理屈（りくつ）では説明できない神秘が消滅（しょうめつ）しつつある現状をふまえれば、科学の発展は人間にとって有益ではない。

イ　子どもたちにとって知的な好奇心（こうきしん）をくすぐるような体験であり、このような体験の積み重ねがすぐれた科学者を誕生させるに違（ちが）いない。

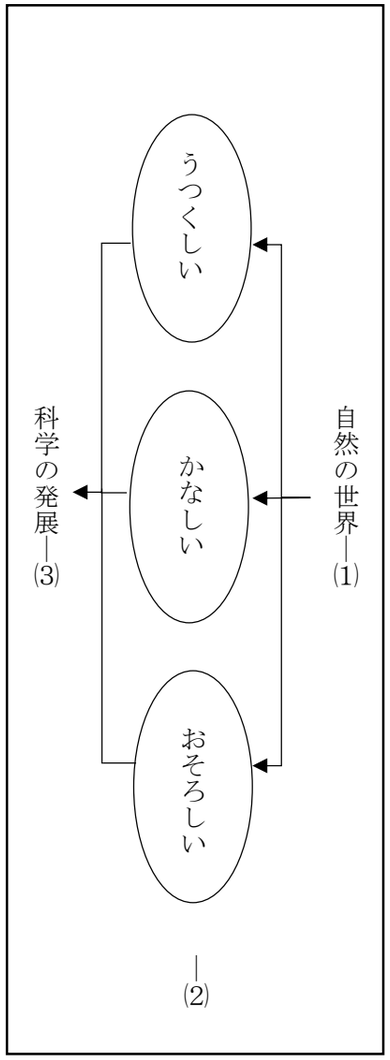
ウ　生や死にしっかりと向き合い、自身と外界との好ましい関係を築くことのできる豊かな心を育む上でも、子どもにとっては大切なことである。

エ　科学的知識にとぼしく事物を感覚的に理解しようとする段階では興味をいだくものの、論理的思考の形成に従って関心を示さなくなってしまう。

オ　直接的な体験が不可能な領域を発見すること自体重要なことであり、それについて様々な角度から思考することによって、科学は進歩する。

問八　○○さんは本文を読んだ後、次のようにノートにまとめ、それについて説明しました。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ノート



説明

・(1)は人間の力、特に知恵（ちえ）や知識がおよばないもので、私たちにとってはいわば神秘の世界です。そんな世界は決してなくなることはありません。

・(2)は自然の中にある三つの領域を表しています。それぞれに独立しているこの三つを意識することで、一つの神秘は理解可能なものになります。

・(3)は神秘の世界をしっかり受け止めることから始まります。神秘を解き明かすのが科学なのですが、(1)で述べたように神秘は数知れずあるのですから、私たちが自然に向き合う姿勢さえ忘れなければ、科学は発展し続けるはずです。

問　○○さんのノートおよび説明には誤りがふくまれています。

Ⅰ　説明の中のどの部分が誤りですか。その部分をぬき出して答えなさい。

Ⅱ　Ⅰの部分を正しく改めたノートを作成しなさい。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（五十点）

小金井中央国民学校（国民学校：現在の小学校にあたる。戦時中の呼び名）の新米教員である山岡悌子は五年三組の副担任をしている。元やり投げ選手であった悌子は、担任である吉川の補佐として、体錬科（現在の体育）の授業すべてが任されている。一九四三年の七月半ば、教頭から体力強化のため校庭五周の持久走をするようにと言われた悌子は、ゆっくりでもいいから走るように、と朝礼台の前に整列した五年三組の生徒たちに告げた。

「じゃあここから走りますよ。位置について、よーい、ドン！」

手をたたくと、生徒たちは一斉に走り出した。夏とはいえ薄曇りの日で気温は低く、ふきぬける風も涼やかだ。走るには絶好の環境だと悌子には思えたのだが、案外にも①生徒たちは、二周ばかり走ったところで、歩き出したりしゃがみこんだりしはじめたのである。

「どうしました？　具合でも悪いですか？」

駆け寄って訊くと、「息が苦しい」「疲れた」と口々に答えるから面食らった。いかに子供とはいえ、もう五年生だ。たった二周でここまでへばるとは、にわかに信じがたい。けれど実際、彼らの息の上がり方は尋常ではなかったし、あきらめずに走り続けている生徒たちの足の運びも緩慢で、中には土気色の顔をしている者もある。

三周目が終わったところで、体の大きな豊島啓太までがしゃがみこんでしまった。

「そら、いつもの元気はどうした」

明るくはげまして背中をたたくと、彼はきまりが悪そうにささやいたのだ。

「……腹が、減って」

親戚の家だから遠慮して、飯の量が少なくても我慢しているのだ、と啓太が以前、もらしていたことがふとよぎった。大人の悌子でも、昨今のひもじさはこたえる。育ち盛りの子供であれば、なおさらだろう。

どうしたら、たくましくなれますか――。

悌子たちの世代が、野球選手やお嫁さんになることを夢見ていた年頃に、今の子供たちは、ただ人並みに食べて大きくなることを夢見ている。それすらも見果てぬ夢なのだ。

②そう悟った途端、

「はいっ、走り方やめぇー」

悌子は大声でさけんでいた。指導要綱に沿わなければ、と理性の声が頭の中をめぐっていたが、体が a カッテ に動いて、生徒たちを一箇所に集めてしまったのだ。

「この校庭のどこでもいいですから、みなさん好きな場所に寝っ転がってください。そうして、よくよく空を見てください」

雲間から太陽が少しのぞいている。わたる風が頬や b クビスジ をはげますようにさすっていく。生徒たちは、悌子の言葉に顔を見合わせている。

「③さ、早く寝転んで。しばらく空をながめたら、ご自身が、戦争が終わったあとにやりたいことを大きな声で言ってみましょう。寝転んだままでいいですからね」

願いごとは、口に出すといいんだよ、と教えてくれたのは＊清一だった。小学生の頃、野球選手を目指すようになった彼は、よく高いところに登っては、「甲子園に行きたい」「六大学の野球部に入りたい」と空に向かってさけんでいた。そしてその言葉通り、着実に夢を実現していったのだ。

「あの、この行いには、どういう意味があるのでしょうか？」

青木優一が、＊しゃちほこばった質問をする。

「意味はありません。＊文部省からの通達でも、軍部からの命令でもありません。私が、みなさんにやってほしいのです」

悌子は、＊けげんな顔の生徒たちを見わたして告げた。松田賢治が近くに寄ってくる。

「よく聞こえなかったから、もう一度」

彼は耳が聞こえにくいという不自由を、少しも負い目に思っていない。いつも堂々として、友達とも明るく接し、みなをよく笑わせている。自分の体格に劣等感をいだいてきた悌子は、そういう賢治をひそかに尊敬していた。

今一度、賢治にもはっきり聞こえるよう、悌子は声を張る。

「体錬科の授業ですから、体作りを重んじます。ですが、体を育てるにはまず心を育む必要があります。そのためにもみなさんの本当の気持ちや願いを、言葉にしてみましょう。そうすることで、ご自身の本心がなにを思っているか、知ることができます」

「自分の思っていることくらい、口に出さなくたってわかります」
優一が即座に言い返してきた。
「そうでしょうか？　人というのは誰しも、自分をあざむくことができます。したいことを我慢するうち、もともとしたくなかったんだと思いこんでしまったり、誰かを好いた気持ちに蓋をして、いつしかその相手をきらいになっていたり。自分でも知らず識らずのうちに、本当の思いとは異なる方向に歩き出してしまうことが、よくあるのです」
ことに今は戦時下で、子供たちは我慢を強いられている。思考まで c[トウセイ]されている。思ったことを思ったままに口にすることさえ、慣れていないのだ。
美少女の米田幸子があっけらかんと、「走らなくていいならよかった」と言い、校庭の真ん中に横たわった。これにつられて、ひとり、またひとりと、地面に仰向けに寝転んでいく。みな、空を見つめて深呼吸をしている。目をつむり、そのままねむってしまったかに見える生徒もある。
しばらく静かな時が流れた。やがて、最初に寝転がった幸子が、
「髪飾りをつけて、赤いスカートをはいて、銀座の街にお買い物に行きたい」
と、小さな声で発した。そこから、
「父さんと海釣りに出かけたい」
「とびきりあまい飴を三十個なめる」
ひかえめな声が連なっていく。
「もっと大きな声で。空に届きませんよ」
悌子は明るくうながした。
「父さんと母さんとまた一緒に住む」
「兄ちゃんと腹一杯文字焼きを食べる」
大声でさけぶうちおかしくなってきたのか、生徒たちは空を向いたままケラケラ笑いはじめた。場が和んだところで、すかさずお調子者の賢治が、

「海中探検と宇宙旅行に行く」
と壮大な夢を打ち上げ、するとそれまで、ささやかな日常を取りもどすべく願いを唱えていた生徒までもが、
「外国で映画監督になる」
「日本舞踊の＊名取になる」
と、おそらく胸のずっと奥底にしまいこんでいた夢を声にしはじめたのだ。
「剣道の世界大会に出て、一等になる」
「平和を作る政治家になる」
絶叫に近い声がこだまのようにあたりに響きわたったそのとき、校舎から d[ケッソウ]を変えた教頭と吉川が駆け出してくるのが、悌子の目の端に映った。
放課後、悌子は職員室で二時間ほどこってり絞られることになった。④御国の大事なときにあんな馬鹿げたことをさせるとはなにごとか、と怒鳴る教頭に、平身低頭わび続けた。隣で一緒に叱責を受けている吉川に対しても、申し訳なさでいっぱいだった。
「まことにすみません。頭ではわかっているんです。指導要綱に従わなければならないことは、よくわかっているのですが」
せわしなく＊手刀を切りつつ話すのは、悌子が頭を整理するときの癖なのだが、教頭にはそれが＊不遜な態度と見えたのだろう。こめかみの血管を蛇のようにうねらせ、いっそう声をあらげた。
「彼らは、この国を支える立派な＊少国民ですっ。人員なんです。男子は御国のために命を捧げ、女子は＊銃後を守るよう教えるのが我々の役目なんですよっ。体錬科の授業は、戦地で立派な働きができるよう体をきたえるためのものなんです」
教頭の語る理念はもっともだが、体は食物によってできている。長らく運動にいそしんできた悌子はそう実感している。昨今の食糧事情では、過度な運動をさせるほうが e[キケン]ではないか、と進言するため口を開いたとき、
「私の監督不行き届きです。まことに申し訳ございません」
悌子を制すようにして、吉川が頭を下げた。教頭が、これみよがしに嘆息する。
「たのみますよ。高等科には配属将校がおって、本格的な軍事教練もはじまっております。遊び半分でいて、上の学校に行ってからひどい目にあうのは生徒たちなんですから」

説教が済んで職員室を出るや、ふらついた。何度も頭を下げたから、血が上ったのだろう。
「吉川先生にまでご迷惑をおかけして、申し訳ありません」
廊下を行きながら改めてわびると、吉川はあろうことか、プッと小さくふき出したのだ。
「あなたは、面白いことを思いつきますな」
悌子は返事をしあぐねる。
「あの、別にふざけていたわけではなく……」
「わかっております。面白い、というと語弊がありますな。よいことをなさった、と私個人は思いますよ」
「そうでしょうか。⑤……私、なにがいいことなのか、よくないことなのか、よくわからなくて」
悌子の言葉に、吉川は笑みをしまった。

X

＊注　清一＝悌子の幼なじみ。今は、社会人野球で活躍している。
しゃちほこばった＝緊張して、かたくなった様子。
文部省＝現在の文部科学省のこと。
けげん＝なっとくがいかない様子。
名取＝舞踊などを習う者が、師匠から芸名を許されること。
手刀を切る＝相撲で、力士が懸賞などを受け取るときの作法。
不遜＝思い上がっていること。
少国民＝少年少女のこと。
銃後＝直接戦闘に加わらない国民のこと。

（木内昇『かたばみ』より）

問一　a［　　］～ e［　　］のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　――線部①とありますが、生徒たちのこのような様子を、悌子はどのように理解することになりますか。解答欄の形式に合わせて説明しなさい。

問三　――線部②とありますが、この部分についての説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア「そう悟った」の内容は、悌子が自分たちの世代はめぐまれていたことに気づいたということである。
イ「悟った途端」からは、教員として生徒の様子を落ちついて観察し、それを行動に移せる悌子の性格がうかがえる。
ウ「はいっ」には、生徒たちの注目を集めた上で、これまでの状況を一変させようとする悌子の強い意志が表れている。
エ「走り方やめぇー」には、指示された通りに走ろうとしない生徒たちに対する悌子の怒りの感情が表現されている。
オ「大声でさけんでいた」は、生徒たちに対して理屈ではなく本能的に指示を出している悌子の状態を表している。

問四　――線部③とありますが、悌子はなぜこのようなことをさせているのですか、説明しなさい。

問五　――線部④とありますが、この部分からうかがえる「教頭」の考え方を説明しなさい。

問六　――線部⑤とありますが、この言葉からうかがえる悌子の内面を説明しなさい。

問七　本文を読んだ後、先生と生徒が次のような会話をしました。これを読んで、後の問いに答えなさい。

生徒　この小説には、「空」を見上げる描写がたくさん登場していましたね。
先生　そうですね。この小説では「空」は読解のための一つの鍵になっていると言えそうです。次の文章を読んでみると、そのことがよりよくわかると思いますよ。吉川先生が小学校を退職する際、悌子と話をしている場面です。

「実は、そもそも私は、希望して小学校の教員になったわけではありませんでね。はじめは半ば自棄でこの職に就いたのですよ」
幼い頃はこれでも神童と周りからもてはやされたんですよ、と彼はかつての自分を茶化すような口ぶりで続けた。中学まで成績は常に一番で、難なく名門の高等学校に進んだ。いずれ＊官員になろうと意気ごんでいたが、全国から集まった英才に交じるや、たちまち高かった鼻をへし折られた。そんなはずはないとあせり、毎日深夜まで机に向かったが、成績は下から数えたほうが早かった。自分は特別ではなく＊凡庸なのだと思い知らされた。
「世の中には頭のいい人間がこんなにいるのか、と愕然としましてね。生まれてはじめて、大きな挫折を味わったのです」
入学より卒業が難しいと言われる学校で下位の成績を取り続ければ、当然＊放校になる。絶望の中でとりあえず就いたのが、小学校教員の職だった。当初はやる気もなく、長く続ける気なぞさらさらなかったが、子供たちに接するうち、さまざまな個性や可能性の扉があざやかに開くのを日々目の当たりにしているような充足感で満たされていった。同時に、自分はこの職に出会うために在ったのだ、と確信できたと彼は語った。
「挫折は＊忌み事ととらえがちですが、もしかすると『お前はそっちじゃないよ』という天からの差配かもしれない、と今になると思うのです。挫折とはきっと、正しい扉を開くための尊いきっかけなんでしょうね」
吉川の声を聞きながら、やり投げ選手として挫折し、清一と一緒になる夢にもやぶれた自分が今、手にしているものを悌子は思った。どちらも自分に似合っているような気がした。
「私、来期に教員検定を受けて、正式教員になります。それでいつの日か、吉川先生のようなすばらしい教師になれるよう精進します」
おこがましい気もしたが思い切って伝えると、吉川は目を細めて力強く顎を引いた。
「あなたは教師に向いていますよ。すでに子供たちにしたわれ、信頼されている。私なぞすぐにこえていかれるでしょう。あなたは教員としても人としても、すばらしい資質をお持ちです。自信を持って進んでください」
鞄をわたすと吉川は早速それを肩にかけ、その場でくるりと軽やかに回ってみせた。
＊注　官員＝役人。　凡庸＝平凡でとりえのないこと。　放校＝学校をやめさせられること。　忌み事＝嫌なものとしてさけること。

先生　この部分に出てくるのは「天」です。では、「空」と「天」を比較してみましょう。
生徒　「天」については「天からの差配」という表現があります。一方の「空」では子供たちが「空に向かってさけんでい」ました。
先生　そうですね。ということは「から」と「向かって」という視点の方向の問題になりそうです。
生徒　そうか。「天」と「空」の違いは、［　I　］という点にあるのですね。
先生　その通りです。そう考えれば、本文の最後の吉川先生の行動、［　X　］の意味も理解できそうですね。
生徒　なるほど。悌子と同じ思いを持っている吉川先生は、ここでも「天からの差配」を期待していたのでしょうか。
先生　そうですね。いずれにせよ、この小説において「空」と「天」の両者は登場人物たちをあたたかく見守ってくれている存在だと言えそうですね。

(1)　［　I　］に入る言葉を、五十字以内で答えなさい。

(2)　本文中の［　X　］には吉川先生のある行動が入ります。それはどのような行動だと考えられますか、答えなさい。

（このページで、問題は終わりです。）